



# 文化遺産特別演習 報告書

第4号



ハツ場ダムにて

北海学園大学人文学部



# 文化遺産特別演習 報告書

第4号

## 目次

---

令和6年度 文化遺産特別演習 報告 引率教員 谷端 郷・大森 一輝……………	10
世俗社会に位置する宗教聖地 金子 空……………	12
明治後期以降の富岡製糸場の役割 菅谷 駿希……………	16
製糸業を産業観光の視点から盛り上げるには 東田 純奈……………	19
日本とフランスの関わり 大鳥居 沙紀……………	24
ダークツーリズムを体験して 久保 瑞葉……………	28
浅間山北麓ジオパークと箱根ジオパークの違い 河端 倅太郎……………	32



陽明門



黄金の良い縁うさぎ



神廐



# 日光～ 鬼怒川温泉



神橋を眺める学生



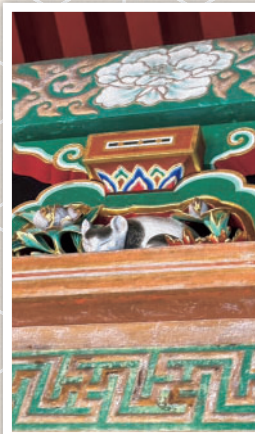
神橋をこれから渡る学生



日光の門前町を歩く学生



日光東照宮の鳥居



眠り猫(日光東照宮)



夕食風景



鬼怒川温泉の景色



日光の神橋

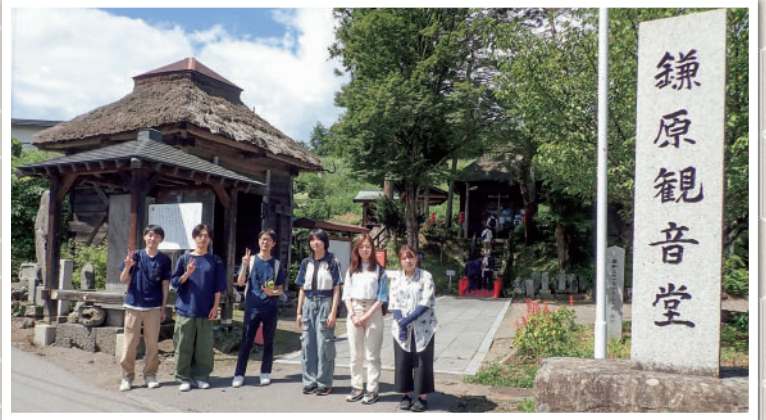
2日目  
9月11日  
恋野原  
~ 鎌原



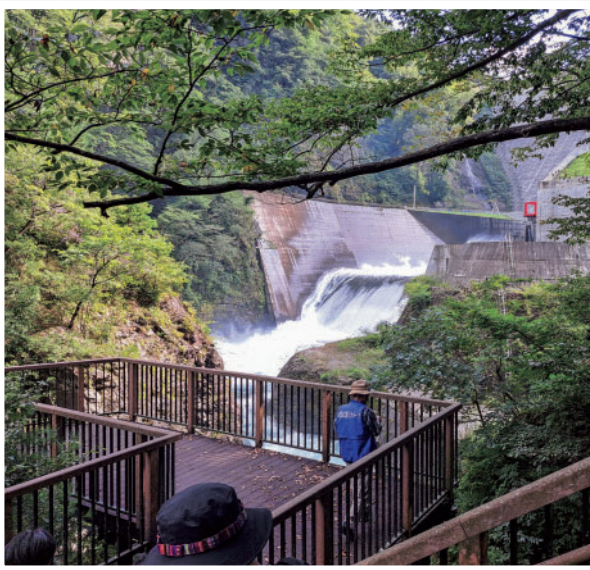
鎌原観音堂①



鎌原観音堂②



鎌原観音堂前集合写真



ハツ場ダム(下流から)



ハツ場あがつま湖



ハツ場ダムツアー①



ハツ場ダムツアー②



ハツ場ダムツアー③



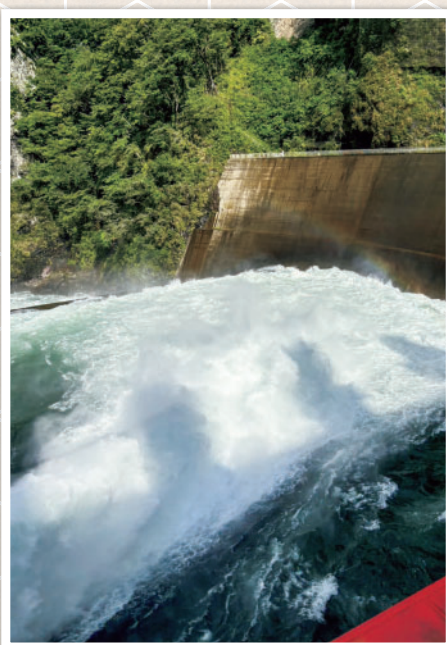
ハツ場ダムツアー集合写真①



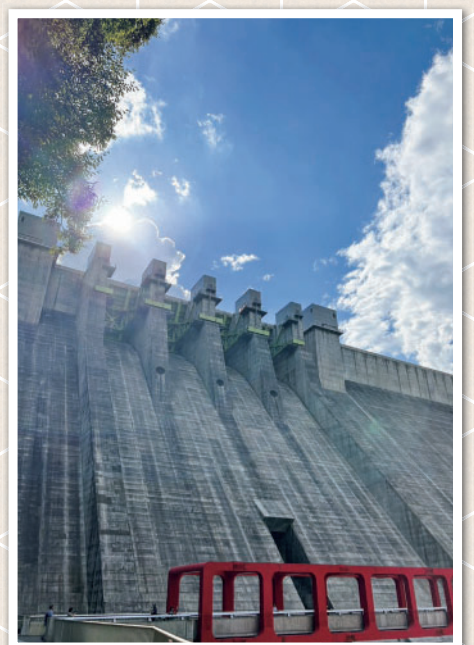
ハツ場ダムツアー集合写真②



ハツ場ダムと雨



ハツ場ダムと虹



ハツ場ダムを見上げる

3日目  
9月12日  
富岡～深谷  
～春日部



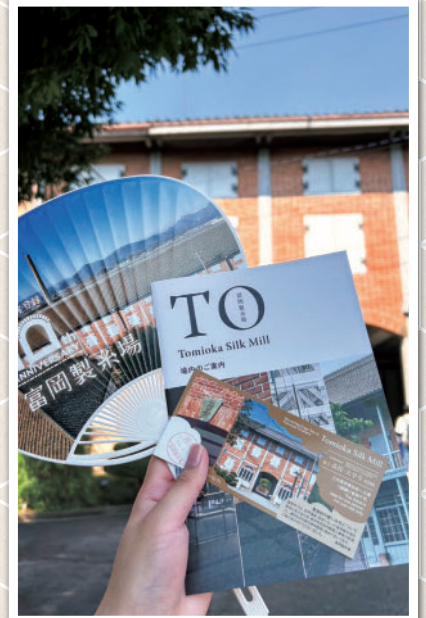
富岡製糸場前集合写真



富岡製糸場 繰糸場



富岡製糸場見学風景



富岡製糸場



富岡製糸場内ツアー



繭(群馬県立世界遺産センター セカイトにて)



渋沢栄一の生家



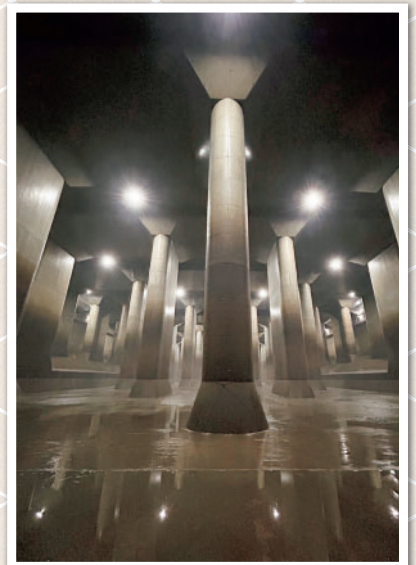
渋沢栄一記念館



首都圏外郭放水路集合写真



首都圏外郭放水路①



首都圏外郭放水路②



首都圏外郭放水路見学の様子



首都圏外郭放水路③

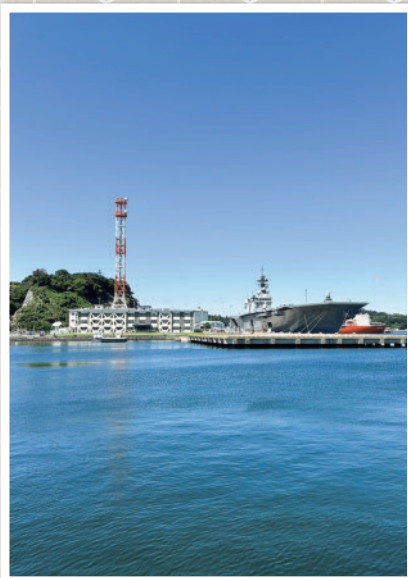
4日目  
9月13日  
自主研修



ヴェルニー記念館



横浜賀市自然・人文博物館



横浜製鉄所跡地



観音崎灯台



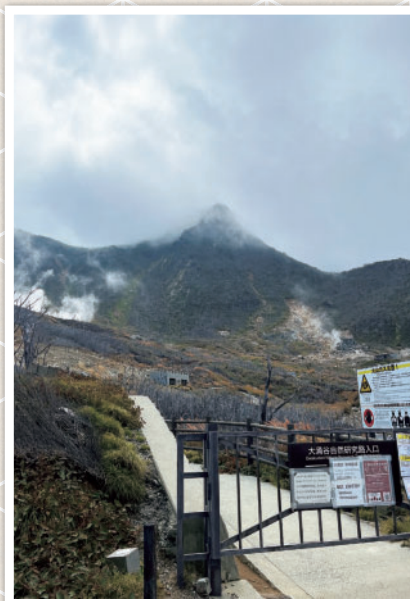
三溪園①



三溪園②



東京農工大学科学博物館



箱根ジオパークにて①



箱根ジオパークにて②





成果報告会①



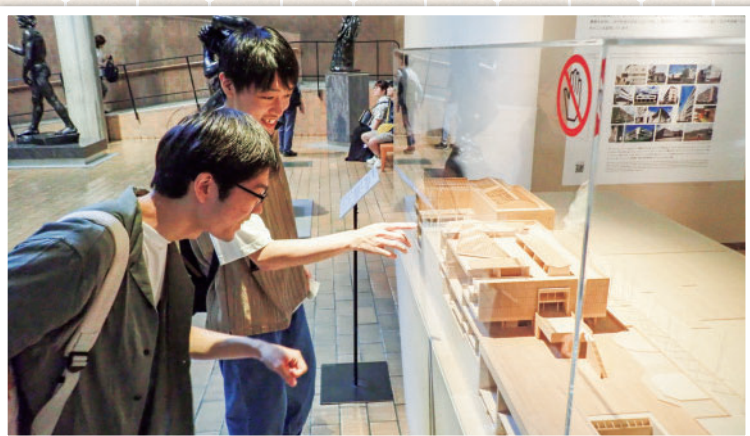
都内



成果報告会②



国立西洋美術館



国立西洋美術館の館内



考える人(国立西洋美術館前)

# 令和6年度 文化遺産特別演習 報告

引率教員 谷端 郷・大森 一輝

文化遺産特別演習は、日本各地にある世界遺産の周辺で研修旅行を行い、「歩く、見る、聞く」学習を通して、日本文化とその世界的な意義についての理解を深めるための演習です。2020年、21年と新型コロナウイルスの流行を受けて中止していましたが、22年（東北地方）、23年（九州北部（平戸・長崎））に続いて2024年度は「関東（とくに北部）」を研修先として実施しました。

研修では、世界遺産「日光の社寺」（日光東照宮など）、「富岡製糸場と絹産業遺産群」、「国立西洋美術館」を中心に、渋沢栄一記念館や浅間山北麓ジオパーク、首都圏外郭放水路などを9月10日（火）～14日（土）の4泊5日の日程で巡りました。

今回は、以下の6名の1・2・4年生（1部日文4名、2部日文2名）が参加しました。

金子 空・菅谷 駿希・東田 純奈・大鳥居 沙紀・久保 瑞葉・河端 倅太郎

旅程は次の通りです。

- 9月10日（火） 新千歳空港から空路で茨城空港に到着。日光東照宮・輪王寺・二荒山神社を見学。鬼怒川温泉泊。
- 9月11日（水） 群馬県嬭恋村に移動して散策。吾妻渓谷と八ッ場ダム周辺を巡るウォーキングツアー参加。前橋市内泊。
- 9月12日（木） 富岡製糸場、渋沢栄一記念館（埼玉県深谷市）、首都圏外郭放水路（埼玉県春日部市）の地下神殿コースを見学。都内泊。
- 9月13日（金） 自主研修（各自研究テーマによるフィールドワーク）。都内泊。
- 9月14日（土） 成果報告会開催。国立西洋美術館見学。羽田空港から新千歳空港到着。

今回の研修先は主に関東でした。関東及びその周辺に所在する世界遺産（とその構成資産）は、今回の研修で実際に訪問したところ以外にも、富士山、韮山反射炉（「明治日本の産業革命遺産製鉄・製鋼、造船、石炭産業」の構成資産の1つ）があります。しかし、4泊5日の日程ですべてを廻りきることは現実的ではないと判断し、北関東方面のみを取り上げることにしました。さらに、引率教員の興味関心に応じて、浅間山北麓ジオパークや首都圏外郭放水路など、道中で立ち寄れるところにも併せて巡ることにしました。

今回訪問した箇所すべての共通点をことさら見出す必要もないのですが、個人的にはいずれも「利根川流域」に位置する点に注目しました。今回訪問した箇所相互の関連性はほとんどありませんでしたが、それらが実は1つの水系で繋がっているということに気付くと、そこから

様々な妄想が膨らんでいきます。たとえば、水系の繋がりからイメージされることの1つに「流域治水」があり、それによって今回訪問した八ッ場ダムや首都圏放水路などが関係してきますし、日本史の教科書にも出てくる江戸時代の利根川東遷事業、利根川支流の渡良瀬川流域で問題となった足尾銅山鉍毒事件もこの文脈で考えることができそうです。あるいは「舟運」もあります。実際、利根川舟運の河岸場の分布図を見てみると、富岡（鏑川流域）や日光付近（鬼怒川流域）のような奥地にまで舟が遡上していることが確認できます。さらに、「繋がり」を敷衍していくと、利根川流域においては、結局江戸・東京とその周辺地域との繋がりということに終始していくことになり、そうすると、舟運以外にも街道（中山道や日光街道など）や鉄道における繋がりもあり、聖地巡礼や近代化と関連付けて考えられそう…。

このように、今回の研修旅行で、江戸・東京とその周辺地域がどのように結びついていたかを、治水、産業、宗教など様々な視点から捉えられると面白いのではないかと妄想が膨らみました。そして、関連する資料を集めて、事前学習や現地での説明を少々試みてみましたが、力不足もあって受講生にどこまで伝えられたかは非常に心許ないものでした。いずれにしましても、一見まとまりに欠ける今回の訪問箇所の中から、受講生は各自の興味関心に従って、産業の歴史や産業観光、聖地巡礼、ダークツーリズム、日仏交流、ジオパークなど興味深いテーマを設定してくれました。そして、4日目の自主研修では、各自設定したテーマに基づいて訪問先を自ら検討し、都内にとどまらず隣県にも足を運んだり、また事前にインタビューのアポイントメントをとったりするなど、全体的に積極的に取り組んでくれたことを非常に嬉しく思います。

最後になりますが、旅行全般のコーディネートを担当していただきました、日本旅行北海道札幌支店の佐藤みなみさんにお礼申し上げます。ありがとうございました。

# 世俗社会に位置する宗教聖地

1 部日本文化学科 1 年 2724128 金子 空

## 1. はじめに

私はこの演習で「世俗社会に位置する宗教聖地」というテーマを設定し、宗教聖地のあり方を考察することにした。そのために事前学習では、岡本亮輔著『聖地巡礼―世界遺産からアニメの舞台まで―』を取り上げ、現地調査で必要な視点を学んだ。本書は、様々な聖地や世界遺産を例に、世俗社会での巡礼の変化、巡礼と観光の融合のプロセスとその社会文化的な変容を明らかにしている。本稿では、本書の第一章と第三章の議論の内容をまとめるとともに、それに沿った現地調査を行い、宗教聖地のあり方について考察した。具体的には、東京カテドラル聖マリア大聖堂（以下、聖マリア大聖堂）、東京ジャーミー・ディヤーナトルコ文化センター（以下、東京ジャーミー）、日光の社寺の3つの宗教聖地に実際に訪れた。

## 2. 『聖地巡礼』第一章要約

本章では信仰のない者にとって聖地巡礼はどのような意味をもつのかについて、信仰者とそうでない者の目的の違いに注目しながら、検討されている。信仰者は聖遺物といった聖なる存在の痕跡を前にして祈るために聖地に向かう。聖遺物とは、主に聖書の登場人物や成人聖女の遺骸の一部、あるいは彼らが生前に触れたとされる遺品のことである。カトリックの教義では、聖遺物そのものに何か不思議な力や奇跡を起こす力が宿っているわけではない。あくまで人々を信仰に向かわせるための手段であるという。

一方、聖遺物は信仰のない者にとっては宗教が生み出したフィクションでしかないが、信仰のない訪問者の要求に合わせて、アトラクションとして改変されたり演出されたりする。こうした「信仰のない者にとって見るに値するもの」と作り直されたアトラクションに、信仰のない訪問者は意味を見出し、そこから本物の体験を引き出しているのだという。

研修では、本書にも登場するカトリックの聖地として聖マリア大聖堂と、キリスト教以外の宗教聖地として東京ジャーミーを取り上げ、実際に訪問した。

## 3. 聖マリア大聖堂と東京ジャーミーを訪問する目的

聖マリア大聖堂は、カトリックの大聖堂で、聖母マリアを信仰する宗教聖地である。同所は1899年に建てられ、翌年に、正式に関口小教区の聖堂となった。後に東京大空襲によって焼失するものの、1964年に献堂され再建された。

私は、自主研修の朝9時頃に同所を訪れた。同所の外装は、他の教会よりも近代的であるが、内装は一般的な宗教的なイメージに近い教会のようであった。そこにはなにかしら、調査をしに来たことを忘れるほどのパワーを感じた。早い時間帯から訪れたため、どれくらいの人が訪れてくるのかは断定できないが、この時間帯では、個人で数人と、団体の観光客が来ていた。

一人の観光客は銅像などの説明を見ていたが、団体やほかの観光客は、施設内の全体的風景、雰囲気味わっており、聖マリア大聖堂を語るものには興味を示しているようには見えなかった。

聖マリア大聖堂を設計したのは丹下健三である。丹下健三は様々な勲章を受章されるなど、世界に多大な功績を残した人物である。大聖堂に訪れたのはどのような団体客なのかは不確かだが、聖遺物や宗教に関連するものよりも、建物自体の雰囲気を味わっている様子から、丹下健三の足跡を追っている団体とも考えられる。ツアーサイトであるポケカルには、丹下健三の聖マリア大聖堂や他の教会を巡るツアーがあるが、調査日に開催されていたかは判然としなかった。

東京ジャーミーは、イスラム教モスクである。1938年、日本政府の協力により、東京イスラム学校が完成した。後に老朽化により取り壊されるが、2000年に東京ジャーミー・トルコ文化センターとして再建されたのが同所である。一階はトルコ文化センターとトルコ料理店、お土産屋とつながっており、トルコ人と日本人との交流の場、二階は礼拝場である。

同所は聖マリア大聖堂と反対に、外装はイスラムのモスクの典型だが、内装はとても近代的であった。そのため、外からは日本人にとってなじみが薄いことから、観光として訪問することを躊躇うかもしれない。反対に、訪問してみればにぎやかな雰囲気に囲まれ、肩の力が一気に抜けるような感覚を味わえる。

観光客と思われる者は数人程度しかいなかった。観光客は、私と同じように、教会らしさが何も感じ取れなかったために、ここはいったい何なのか、戸惑っている雰囲気であった。一方、文化センター内に交流者は多かった。訪問時には、トルコ人同士の交流がほとんどであった。言語が理解できないため、どのような交流かは不確かだが、にぎやかな雰囲気の中で、多くがパソコンを使用していた。このことから、仕事関係といったビジネス交流、あるいは単純に雑談をする安息地であると推測する。他には、日本の学生と留学生が文化の特徴について交流する場面が見受けられた。同所のサイトによると、一年を通して、結婚式や演劇、展示・展覧会、講演といった様々な活動が行われているという。

#### 4. 『聖地巡礼』第三章要約

本章では、非宗教的権威や制度が、伝統的な宗教文化に与える影響について記されている。ユネスコや行政といった宗教の外側にある機関と、訪問者、地元の人々といった宗教の内側にいる人々との間には宗教性に大きな隔りがある。世界文化遺産（以下、世界遺産）の評価基準で特に重要なのは、物としての真正性、完全性である。そのため、ゲストが自分なりの宗教性を感じとったり、民間宗教者による伝統的な実践が続いていても、それらは物としての裏付けを持たない限り、世界遺産として評価されることは難しい。このようなことから、地域や個人の宗教文化が、その普遍的価値を証明するために、伝統の一部がそぎ落とされたり、または編集されたりする。宗教的価値観は、世界遺産などの世俗的な近代的価値観によって変容するのだという。

そこで研修では、世界遺産となった宗教聖地の変容を、日光の社寺で観察した。

## 5. 日光の社寺の選別と編集

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センターのサイトによると、日光の社寺が世界遺産となった理由は、個々の建造物は天才的芸術者達の作品で、高い価値を持つこと、日本的宗教空間の特質を現す建造物群とこれらを取りまく自然環境は一体をなしており、文化的景観の顕著な事例であることだという。つまり、『聖地巡礼』の第三章で述べられているように、日光の社寺の宗教空間は、物として鮮明に残されているから、価値があるのだとわかる。

私が訪れてみても、自然と建造物群の景観は凄まじいものであった。入口にある神橋は、神が通る橋であるが、大谷川と神橋との景観は、神のみが通るのにふさわしいものであった。ここを通るにしても、杉並と建造物の調和性には、驚愕するものがある。このように日光の社寺は、物とそれに付随する景観が残され、世界遺産として評価されたことがわかる。物として鮮明に残り、文化的景観のある日光の社寺は、世界遺産化運動において宗教文化の編集は考えられなかった。

世界遺産化運動による宗教文化の編集は確認できなかったが、観光化による変遷は多いに見られた。二荒山神社の前にある黄金のウサギは、同所との関連性はあるのかもしれないが、本物らしさを見つけることは難しい。そのため、黄金のウサギは観光化による変容といえるのではないか。また、様々なパワースポットの看板や祈願所の見世物化も、観光化の一部だと考えられる。神橋では入場料がかかるが、受付人によると、一般人にも渡らせたいという思いからで、世界遺産になる前から一般公開したのだという。これらのことだけで断定することは難しいが、世界遺産化によって、あるいはそれ以前から、宗教文化の一部が観光客に向けた観光資源へと変容をとげている可能性があるといえる。

## 6. おわりに

世俗社会で宗教聖地として位置するには、観光と世界遺産が重要な役割を持つ。

聖マリア大聖堂と東京ジャーミーのように、観光性の少ない宗教聖地がアトラクション化しても、宗教文化自体が脅かされることはない。それは、主に信仰者の目的と信仰のない者の目的を、施設内で区別しているからだ。聖マリア大聖堂では、信仰者とそうでない者の訪問場は一緒のため、礼拝の際は信仰のない者の訪問はできない。東京ジャーミーでは、礼拝所とそうでない者が訪れる場を区別できるよう建設されている。これらの宗教聖地では、観光客にお金を落としてもらうことは難しいため、世俗社会で存続するためには宗教文化を脅かさないほどのアトラクション化をし、献金して貰わなければならない。実際に訪問したこれらの聖地は献金願いをしていた。

反対に、日光の社寺のように、世界遺産化して観光性が高まったほとんどの宗教聖地は、世界遺産化運動において宗教文化の変容を遂げている。訪問した日光の社寺でも、确实とまでは言えないが、観光による変容が見られた。今後も、これまでの宗教文化を維持し続けることは困難であろう。一方で、多くの観光客を見込んで、入場料が宗教聖地を維持するための重要な資金源となっている可能性も窺えた。

宗教聖地が世俗社会で存続するためには、世俗化の影響を受ける。とくに観光化の影響が多

大である。宗教信仰の自由化で信仰者が減少するのは仕方がないが、その分献金に頼らないといけないなど宗教聖地が不安定になってしまう。その一方で、観光資源の価値を維持・向上させると、伝統的な宗教文化が脅かされる。世俗化によって宗教聖地が様々なジレンマを抱えていることが分かった。ただ、観光化で安易に変容する宗教聖地を、宗教聖地と本当に言ってよいのだろうか。この調査で、観光化を著しく進めることになる世界遺産を目指す理由と制度についての疑問ができた。

[参考資料]

- ・岡本亮輔著『聖地巡礼—世界遺産からアニメの舞台まで—』中央公論新社、2015
- ・丹下都市建設設計 丹下健三について  
<https://www.tangeweb.com/company/kenzo/>（最終閲覧日：2024年11月29日）
- ・ポケカル 丹下健三建築の代表作・東京カテドラル聖マリア大聖堂&美しい教会を巡るバスツアー  
<https://www.poke.co.jp/tour/779>（最終閲覧日：2024年11月29日）
- ・公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター 日光の社寺  
[https://www.nara.accu.or.jp/news/heritage\\_j/nikkou.html](https://www.nara.accu.or.jp/news/heritage_j/nikkou.html)（最終閲覧日：2024年11月29日）
- ・東京ジャーミー  
<https://tokyocamii.org/about-us/>（最終閲覧日：2024年11月29日）  
<https://tokyocamii.org/history/>（最終閲覧日：2024年11月29日）

# 明治後期以降の富岡製糸場の役割

## —時代に合わせて変化し、活躍し続けた富岡シルク—

1 部日本文化学科 1 年 2724161 菅谷 駿希

### 1. はじめに

富岡製糸場は「富岡製糸場と絹産業遺産群」の構成遺産として世界遺産に登録されている。それは、主に日本の近代化に貢献したことなど、明治中期までの実績が主な選定理由になっている。しかし、富岡製糸場の明治後期以後の活躍については世界遺産の選定理由ではあまり触れられていない。そこで本稿では、研修旅行で訪れた、富岡製糸場や群馬県立世界遺産センターセカイト、シルク博物館等の調査内容や、後の調査によって深めた調査結果をもとに、富岡製糸場が大正以後にどのように評価され、どのように運用されていたのかを検討する。

### 2. 日本産生糸と富岡製糸場との沿革

富岡製糸場について考える前にまず、簡単に 19 世紀末から現在までの日本産生糸の輸出動向について触れておく。日本において生糸の生産量が 1897 年に、輸出量が 1909 年に世界一位となった後も、生糸は主要輸出品としての地位を確固たるものとしていた。ただし、生糸の質の面では必ずしも良質とはいえないものがあった点は留意が必要である。このため、官学産三者の協力体制で蚕糸の改良が進められるなど、対策もとられていた。戦時中では、アメリカへの製品の輸出が途絶えると同時に生糸の輸出量も大きく低下することとなる。戦後すぐに GHQ の指示により輸出量は回復していったが、外国産の安価な糸やナイロンの流行をうけて、生糸産業は大きく衰退。現在では日本における生糸産業はほぼ駆逐されている。

次に、富岡製糸場全体の沿革についても簡潔にまとめておく。富岡製糸場は、1872 年から質の良い生糸を産出する官営模範器械製糸場として操業を開始した。その後、1893 年には三井家に払い下げられ、明治後期の 1902 年には原合名会社に譲渡、昭和期に入った 1938 年には株式会社富岡製糸場として独立するが、その翌年、1939 年には片倉製糸紡績株式会社に合併される。以降長く製糸工場として活躍するも、1987 年ついに操業を停止することとなった。現在では、保存修理等の管理を行いながら、一般公開されている。2014 年には、前述のとおり「富岡製糸場と絹産業遺産群」の構成遺産として世界遺産に登録された。

### 3. 富岡製糸場の明治後期以降の発展と活躍

こうした輸出動向と富岡製糸場全体の沿革とを概観したうえで、改めて明治後期以後の富岡製糸場の活躍についての調査結果を報告する。まず、1902 年に三井から原合名会社に譲渡され、1938 年に独立するまでの原富岡製糸場の時代では、主に「特別優等糸」という最高品質の生糸が生産された。藤本正雄『生絲貿易論』によると、1921 年では原合名会社としては全製糸



企業の中でも2位の特別優等格糸の生産量を誇り、原富岡製糸場では半数の2,500個の特別優等格糸を産出している。また、1927年ごろでは、原合名会社の約4割の釜が富岡製糸場にあったのである。

また、経営が片倉に合併された後、富岡製糸場は最先端の設備が積極的に導入されている。1951年に開発された片倉K8型自動繰糸機はその翌年である1952年に富岡製糸場に導入され、同じく、1964年に開発されたニッサンHR型自動繰糸機は1966年に導入された。特筆すべきはその設置数であり、片倉K8型自動繰糸機の方は12セットもの数が導入された。これは他の工場よりも多い設置数であり、富岡製糸場が最前線で活躍していたことが推察できる。また、この自動繰糸機の導入が、世界で初めての自動繰糸機の工業化を果たした例であるとされている。ニッサンHR型自動繰糸機（図1）は現在の富岡製糸場内でもその様相を見ることができ、動いている現場自体はみることはできないものの、想像できない数の生糸を生産してきた繰糸機はそれでも壮観であった。

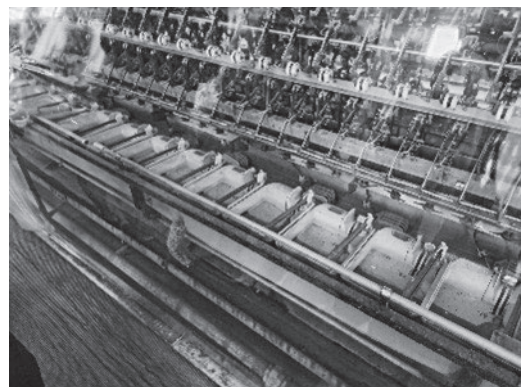


図1

現在、富岡製糸場内で実際に戦後使用され、高級生糸用品種としても国に指定されていた「太平長安」という蚕品種を復活させる『Reborn The Silk プロジェクト』が日本和装ホールディングス株式会社主導で進行している。「太平長安」は戦時中の軍用パラシュート製作のための品種として育成されたが、戦況悪化により戦時中には使用されず、戦後に主要品種として多く用いられた種であり、輸出生糸のホープとしても期待され、実際に多く使用されていた。しかし、生糸の大量生産の需要に合わず、使われなくなっていた。こうした「太平長安」の実用化自体は大日本蚕糸会が前から取り組んでおり、実際に数量限定で販売も行われていた。現在、『Arcsilk』というブランド名で商標登録に出願しており、このままいけば富岡製糸場で使用されていた幻の品種が新たなブランドとしてよみがえることとなる。また、シルク博物館では「太平長安」ではないものの、純日本産の絹織物に触れる機会があった。滑らかな肌ざわりで、日本の絹文化は衰えてきてはいるものの、「太平長安」を含め、文化が受け継がれていることが肌で実感できた。

#### 4. おわりに

以上のように、富岡製糸場の明治後期以後の活動状況を取り上げ、その活躍について検討した。その結果、原富岡製糸場時代では、高品質の生糸を生産・輸出できる原合名会社においても重要な工場として機能したこと、片倉時代では積極的に最新の機材が導入され、日本のみならず、世界の最先端を走る工場としても運用されていったことが確認できた。また、軍需用品として育成され、富岡製糸場でも使われた「太平長安」は、戦後すぐの生糸産業において重要な役割を果たしていたことも明らかとなった。しかし、日本国内での富岡製糸場での評価を確認できたものの、外国からの富岡製糸場の評価までは確認できなかった。群馬県立世界遺産セン

ター セカイトの職員への取材の中で、「アメリカに評価されていたため、戦争末期の爆撃の被害を与えないように動いていたのではないか」という旨のお話をうかがったが、それを裏付けるものはないという話もあり、私もそのようなものは確認できなかったため、外国からの評価についてはこれからの課題としたい。

[参考文献]

---

- ・藤本正雄『生絲貿易論』丸山舎書籍部、1922年、324頁。
- ・石井寛治「富岡製糸場と絹産業遺産群」の世界遺産としての価値一次世代へのメッセージ」、『群馬県立世界遺産センター紀要』第3号、2023年、1-10頁。
- ・木内博文「富岡製糸場に設置された自動繰糸機の変遷」、『令和4年度富岡製糸場総合研究センター報告書』、2023年、43-59頁。
- ・今井幹夫「日本蚕糸製造(株)経営期における富岡製糸場の経営実態—昭和18年10月～21年4月間の経営—」、『富岡製糸場総合研究センター報告書』、2015年、57-75頁。
- ・嶋崎昭典「わが国の製糸業の変遷とこれからの生きる道」『第60回製糸夏期大学記念誌』、農業生物資源研究所製糸技術研究会、2006年、3-33頁。
- ・一般財団法人大日本蚕糸会、“シルクレポート 2019年10月号 (No.63) ”、一般財団法人大日本蚕糸会、2019-10、<https://silk.or.jp/wp-content/uploads/silk63.pdf>、(参照 2024-11-14)
- ・日本和装ホールディングス株式会社、“きものブランド名「Arcsilk (アルクシルク)」に決定! ”、日本和装、2023-12、<https://www.wasou.com/40th/naming02/>、(参照 2024-11-14)

# 製糸業を産業観光の視点から盛り上げるには —富岡製糸場ほか、関東域の製糸業関連施設から考える—

1 部日本文化学科 2年 2723101 東田 純奈

## 1. はじめに

### 1-1. テーマ

私が今回の文化遺産特別演習という授業を受講するにあたって掲げたテーマは「製糸業を産業観光の視点から盛り上げるには—富岡製糸場ほか、関東域の製糸業関連施設から考える—」というものである。

昨今、様々な観光形態が生まれる中に「産業観光」という考え方がある。産業観光は、日本では2001年の「全国産業観光サミット in 愛知・名古屋」で体系的な定義が定められた。それには「産業観光とは歴史的・文化的価値のある産業文化財（古い機械器具、工場遺構などのいわゆる産業遺産）、生産現場（工場、工房等）および産業製品を観光資源とし、それらを通じてもものづくりの心にふれるとともに、人的交流を促進する観光活動をいう」（注1）とある。典型的な例としてはお菓子工場などがあげられる。

これを受けて私の中に一つの疑問が生まれた。それは、富岡製糸場などの製糸業をテーマにした施設や博物館を産業観光という視点で盛り上げることが出来るのかということだ。そこで今回の研修旅行では富岡製糸場のほか、東京や横浜の製糸業関連施設を訪れ、それぞれの施設で産業観光というものがどのように捉えられているのかを考えることとした。

### 1-2. 産業観光の認知度

では、そもそも産業観光というものは世間でどの程度認知されているのか。産業観光推進会議の『産業観光の手法 企業と地域をどう活性化するか』には、1万人を対象にした調査で産業観光は約4割の人に認知されており、また60代の認知度・参加率が高いとある。ほかにも学校で産業観光について学ぶ学生の認知度も高い。このことを踏まえたうえで研修旅行の成果について確認していく。

研修旅行では、群馬県の富岡製糸場、東京都小金井市の東京農工大学科学博物館、神奈川県横浜市のシルク博物館、天王森泉館を訪れた。なお、調査方法としては施設の見学と、施設の方へのヒアリング調査をメインに行った。

## 2. 研修旅行の調査結果

### 2-1. 富岡製糸場

まず訪れたのは富岡製糸場だ。富岡製糸場は1872年に官営の製糸工場として設立された。フランス式の設備などを取り入れ世界でもトップクラスの生糸を生産する工場であった。しか

し、世界的な生糸の価格競争の波を受け 1987 年には操業を停止した。その後「富岡製糸場と絹産業遺産群」として、2014 年に世界遺産に登録された。富岡製糸場には 2023 年の 1 年間で 367,466 人が来場している。この数字は世界遺産登録当時の 2014 年の来場者数 1,337,720 人に比べると大きく減少してしまっているが、コロナ禍の影響を受けたことを考えると回復途中であるということが出来るだろう。

実際に訪れた日には小学生の校外学習の団体に出会い、地域の学校の学習の場として利用されていることを実感した（図 1）。一般客が参加するガイドツアーにも 30 人以上が参加している様子で、観光地としては非常に賑わっている印象を受けた。そんな富岡製糸場の大きな特徴は実際に使われていた工場跡がそのまま残っていることだろう。来場者は当時の建物の様子を見ながら広い敷地の中を自由に歩き回ることが出来る。また当時の機械を使用した操糸の様子も見学することが出来、来館者は当時の様子を目で見て肌で感じる事が出来る。



図1 富岡製糸場と小学生

富岡製糸場は群馬の土地に根付いた製糸業の工場であり、今回注目する産業観光の定義に当てはまっている。実際に訪れてみても、多くの観光客で賑わい観光地として成功を収めていると感じた。ただ、富岡製糸場に観光客が多く訪れているのは、富岡製糸場が世界遺産であるということも大きな要因の一つとして挙げられるだろう。実際に世界遺産に登録された年は、前年度に比べて 100 万人以上の人々が富岡製糸場に訪れた。世界遺産であることはその施設にとって観光客を呼び寄せるのに非常に大きな役割を果たすことは言うまでもないが、そうではない製糸業関連施設では観光は盛んなのだろうか。

## 2-2. 東京農工大学科学博物館

続いて訪れたのは、東京都小金井市の東京農工大学科学博物館である。東京農工大学は農商務省の蚕病試験場に設置された「参考品陳列場」にルーツを持つ。現在では様々な科学技術に範囲を広げている。博物館では養蚕を中心とした繊維関連の資料を展示するとともに、現在大学で行われている最先端の研究活動などについて紹介している（図 2）。ここは大学博物館なので「観光」よりも「研究」に重きを置いているように感じたが、養蚕のことについて学べることは多かった。



図2 科学博物館の講演のお知らせ

## 2-3. シルク博物館

横浜に移動し訪れたのはシルク博物館だ。シルク博物館は横浜開港 100 年記念事業として開館した。ここはシルクに関する総合博物館であり、蚕糸・絹業の変遷や絹の染織工芸の名品、和洋にわたる現代の優れた絹製品の数々を展示している（図 3）。シルク博物館の 2023 年の年間来館者数は 20,212 人で、うち 1,798 人が外国人であることにも注目したい。実際に私が博

博物館を訪れた日にも外国人の来館者がいた。また団体での利用も多く小学校の校外学習の目的地としても選ばれているということだった。ここはシルクの総合博物館というにふさわしく、富岡製糸場にはないような展示がある。絹を使用した服飾品の展示や糸繰り体験、機織り体験ができるのだ。こういった体験の豊富さは富岡製糸場にはない、小規模博物館ならではの良さではないかと考えた。

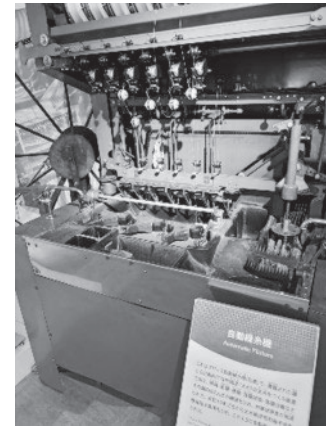


図3 シルク博物館の繰糸機

#### 2-4. 天王森泉館

最後に訪れたのは、同じく横浜の天王森泉公園内にある天王森泉館である。天王森泉館は1911年に興された清水製糸場の本館だ。しかし清水製糸場は関東大震災や大恐慌によって急速に衰えたため、1997年の公園整備に際して製糸場本館当時の姿を再現し、天王森泉公園（図4）の拠点施設として活用されている。天王森泉公園に訪れる人は1年間で約14,000～15,000人とのことで、特に公園内で蚕が飛び交う時期に来園者が多いという。

本施設で印象的だったのは、清水製糸場跡地（天王森泉館）を製糸業関連遺産として前面に押し出していなかったことだ。天王森泉公園運営委員会事務局長の中木琢夫氏は、天王森泉公園や館の存在意義は住民の憩いの場であることだと語る。ただ、天王森泉館に製糸場跡地であることを前面に押し出して運用する方針もあり得たはずだ。そうならなかった理由として、中木氏は1931年に本館の建物は移築され民家として再利用されており、その際にもともと建物があった場所は更地にしていただけではないか、その後1997年に公園化した元場所はすでに更地になっていたため「製糸場の姿を残す」というのは不可能だったのではないかと推測してくれた。もし1997年時点で工場が現存していればそれを生かしたかもしれないが、既に民家のみとなっていたため、それを再生することしかできなかったのではないかと語ってくれた。



図4 天王森泉公園

このような理由もあってか、天王森泉館は製糸場跡ということを前面に押し出すようなアピールはしていない。しかし、季節に応じたイベントを行う際には多くの人が公園を訪れ、公園の自然を楽しんでいるという。たとえ観光地として活用せずとも、公園という形に生まれ変わって別の形で活用されていく事例もあるのだと知り、とても興味深かった。

このような理由もあってか、天王森泉館は製糸場跡ということを前面に押し出すようなアピールはしていない。しかし、季節に応じたイベントを行う際には多くの人が公園を訪れ、公園の自然を楽しんでいるという。たとえ観光地として活用せずとも、公園という形に生まれ変わって別の形で活用されていく事例もあるのだと知り、とても興味深かった。

### 3. おわりに

#### 3-1. 研修旅行を通しての感想

今回の研修旅行を通じて、まずは製糸業に関する施設がことのほか存在することに驚いた。また、各施設それぞれ特徴が異なっており、様々な角度から製糸業と産業観光のつながりを検

討することができ、調査をしながらも観光として楽しむことが出来た。

とはいえ、産業観光と聞いて思いつくようなお菓子の食品工場のようなものと比べて、製糸業という産業が興味を持たれづらいテーマであると感じたのは事実である。しかし、富岡製糸場やシルク博物館では小学生の校外学習などで多く訪れられており、教育に生かされていることがわかった。また、人々が産業観光に参加したきっかけの調査では、学生が産業観光に参加したきっかけが「学校における視察や研修機会があった」（注2）ことがもっとも高くなっており、小学生や中学生の団体などに施設に来てもらうことは、大きくなった学生が将来の旅行先の一つとして製糸業関連遺産を検討することに繋がると考える。またシルク博物館で全来館者のうちの約10%が外国人観光客だったように、絹産業は外国人にも注目されていると考えられる。絹は所謂「Made in Japan」のイメージが強く外国人の興味関心を引くものではないだろうか。そうした点を考えると製糸業関連施設は今後外国人観光客の集客を見込めるのではないだろうか。

### 3-2. 今後に向けて

そして冒頭に掲げた「製糸業を産業観光の視点から盛り上げるには一富岡製糸場ほか、関東地域の製糸業遺産から考える一」という論題に関して、私は二つのことが重要であると考えた。

一つ目は、「体験」できることを増やすことだ。

私はこの授業に参加するまで製糸業について深い関心を抱いていたわけではないが、そんな私でも、今回製糸業関連遺産に初めて訪れた自分自身が観光として各施設を楽しむことができたが、特に、富岡製糸場やシルク博物館で製糸業に使用された機械や工場を見るのは面白く、様々な学びがあった。中でも、シルク博物館で繰糸体験をしたことは強く印象に残っている。繰糸体験は実際の繰糸機を使用するわけではなく、構造は同じくして簡易的に作られた繰糸機で体験をするのだが、簡易なものであっても実際に自分の手で触ることが出来たというのはいずれも素晴らしい経験だった。また産業観光の中でも、「体験」という行為が人気であるといわれており、リピート率も高くなっている。

以上のことから「体験」を導入することによるメリットも大きいと考える。自分で体験したことは見たり聞いたりしただけのことに比べて記憶に残りやすい。製糸業の産業としての現役性は強くない。言い換えると「過去の産業」ということもできるだろう。今後ますます身近ではなくなっていく製糸業というものを、「体験」を介することで人々に記憶してもらうことは非常に重要だと考える。

二つ目は、製糸業関連施設同士のつながりを強化することだ。

現在、富岡製糸場が製糸業における観光地のトップランナーであることは間違いない。富岡製糸場で群馬の絹産業遺産は宣伝されているが、横浜の施設に関しては全く宣伝されていない。富岡製糸場で横浜の施設に関しても宣伝をしたら、そこで製糸業や絹に興味を持った人が知識を深めるために訪れる第2、第3の場所として横浜が候補に上がり客足の増加を見込めるのではないだろうか。また横浜の博物館などで富岡製糸場の周知をすることも、県を超えて製糸業関連施設を結びつけることに繋がるだろう。

先述したように製糸業を「過去の産業」というのであれば、施設同士がより強固に結びつくことが今後の存続にも大きく関わってくると考える。

観光地における大きな課題として、リピーターをどのように創出するかという問題がある。たとえ世界遺産に登録された遺産でも、登録時には大きく注目を浴び客足も伸びるが、時間が経てばその注目は徐々に落ち着いていってしまう。

ではどうしたら1度来た人にまた来たいと思ってもらえるのか。一例として、リピーターだけに向けた施策を行うことや、客の声を受け止めて反映させることが大切だと考える。また新規客層を開拓することも大切だが、リピーター獲得のためには現在訪れてきている客を大切にすることも重要だと考える。新たな試みを始めて変えていくところと、これまでの良さを保って変えないところ、すなわち「変化」と「不変」をバランスよく取っていくことが肝要だと考える。

「学校における視察や研修機会があった」から産業観光に参加する学生に対して、小学校・中学校のうち校外学習に来てもらうということもできている。また外国人の関心を惹けるテーマでもある「製糸業」。今後來た人が自分の手で体験できるような工夫をし、製糸業関連施設が手を取り合い相互に情報発信をしていけたら、製糸業というジャンルも今後産業観光として盛り上がるポテンシャルは十分に秘められていると感じた。

(注1)、(注2) 産業観光推進会議『産業観光の手法 企業と地域をどう活性化するか』学芸出版社、2014年

[参考資料]

- ・富岡製糸場 年度別見学者数  
[https://www.tomioka-silk.jp/\\_tomioka-silk-mill/guide/record.html](https://www.tomioka-silk.jp/_tomioka-silk-mill/guide/record.html) (2024年10月30日 最終閲覧)
- ・シルク博物館令和5年度年報  
<https://www.silkcenter-kbkk.jp/wp-content/uploads/2024/06/nenpou.pdf> (2024年10月30日 最終閲覧)
- ・天王森泉公園 館の歴史  
<https://www.tennoumori.net/%E3%83%88%E3%83%83%E3%83%97/%E9%A4%A8%E3%81%AE%E6%AD%B4%E5%8F%B2/> (2024年10月30日 最終閲覧)
- ・生糸が結んだ世界との絆 富岡製糸場と絹産業遺産群
- ・Tomioka Silk Mill 場内のご案内
- ・シルク博物館 (パンフレット)
- ・東京農工大学科学博物館 ご案内
- ・横浜市天王森泉公園

# 日本とフランスの関わり

## —日仏交流とお雇い外国人—

1 部日本文化学科 2年 2723113 大鳥居 沙紀

### はじめに

今回の文化遺産特別演習で訪れる世界遺産について調べたところ、富岡製糸場と国立西洋美術館の2箇所にフランスという共通点があることに気が付いた。富岡製糸場を設立したのはフランス人のポール・ブリュナであるという点と、国立西洋美術館の本館を設計したのはフランスで活躍していた建築家のル・コルビュジエであるという点である。これらの点から、日本にはフランスとの強い結びつきがあると考えられる。このことについて実際にその場所を訪れながら調査していきたい。また、準備段階で文献等を読んでいくうちに、フランスに対しての疑問が浮かんだ。日本がフランスに交流を求めたのは、近代化が進んでいたフランスの技術などを取り入れるためであると考えられる。しかし、なぜフランスは日本と交流をもつと決めたのだろうか。なぜ日本にわざわざ来て、技術を教えてくれたのだろうか。この点について疑問を持ったため、今回関連のある場所に訪れることで情報を得ることができないだろうかと考えた。

これらのことから、ひとつは日本とフランスの関係や日仏交流について調べることを、もうひとつはフランス人が日本で大きな仕事を成し遂げたのはなぜか調べることを調査目的とする。

### 1. 日本の人物・世界遺産とフランスとの関わり

今回の演習で訪れた中で筆者の調査目的と関係がある場所は、富岡製糸場、渋沢栄一記念館、国立西洋美術館である。

富岡製糸場（群馬県富岡市）が創業したのは明治5年である。建設された目的は日本で一般的ではなかった器械製糸の模範を国内に示すこと。横浜のフランス商館で生糸検査人だったポール・ブリュナは、日本の製糸業の特質に通じており、生糸を見る目があったため指導者に抜擢された。彼は工場建設のための見込書を政府に提出したり、建設地の選定をしたりと積極的に活動した。ブリュナは「日本に根ざした風土や文化を取り入れなくてはうまくいかない」と思ったようだ。ブリュナは日本としっかり向き合い、日本には古くからの大切な風土や文化があると理解していたのではないかと筆者は考える。建設において、日本には調達できなかった操糸器やガラスは、フランスから輸入した。そのため、富岡製糸場は、日本の文化を重んじながら西洋の技術を取り入れた、和洋折衷の「富岡式」の建物といえるだろう。

富岡製糸場の建設において忘れてはいけないのは、レンガである。実際に訪れた際も、赤レンガが並ぶ建造物が印象的だった。ブリュナが優秀な職人を集めて完成させたレンガは、長手



図1 フランス積みレンガ



と小口を交互に並べるフランス積みの木骨レンガ造で利用された（図1）。セメントの代わりには日本古来の漆喰が使用されている。ここでも西洋の技術と日本の技術が混ざり合っているのである。

渋沢栄一は、2024年7月から新一万円札の肖像画に選ばれた人物である。渋沢栄一記念館（埼玉県深谷市）には新一万円札について説明した展示コーナーがあった。彼はフランスに留学して進歩的な思想や近代化された社会の仕組みを学んだり、ブリュナの雇い入れに関わったりとフランスとの関わりがある人物である。彼のいとこである尾高淳忠は富岡製糸場の初代場長だ。尾高淳忠は富岡製糸場で「フランス人が工女の生き血を飲む」と噂が広まったとき、彼の娘の尾高勇を第一工女として働かせ、噂や誤解を正し、工女の意義を知らしめた。彼らも富岡製糸場においてフランスと繋がりをもっていたといえる。

第二次世界大戦での敗戦後、日本はサンフランシスコ平和条約により連合国からの占領から主権を回復した。その際に日本はフランス政府が所有していた松方幸次郎が集めた松方コレクションの返還を申し入れた。寄贈返還の条件のひとつとしてフランス政府から示されたのが美術品受け入れのための美術館の新設であり、そこで建設されたのが国立西洋美術館（東京都台東区上野）である。その本館の設計をしたのがフランスの建築家、ル・コルビュジエだ。国立西洋美術館に畏敬の念が抱かれているのは、彼の日本人の弟子である3人が名を成したこと、戦後の日本台頭の象徴となったこと、生活の調和を重んじた世界観が日本の風土とあっていたことが主な理由である。国立西洋美術館は日仏交流の歴史の一齣というだけでなく、戦後の日仏間の関係改善の象徴であったと考えられる。

国立西洋美術館に足を踏み入れた時、他の美術館とは異なる独特な空気、雰囲気にも包まれたのを感じた。上の階からも下の階を見ることができ、吹き抜けの構造で、美術館全体の空気を全身で感じられるような空間だった。美術館を訪れた人々が、数多く並ぶ作品の前で足を止めひとつひとつ鑑賞し、作品と向き合っているように感じられた。一度訪れただけではル・コルビュジエの思想全てを感じることは難しいが、少しでも彼が国立西洋美術館に託した想いを感じ取りたいと思った。

## 2. 横須賀とフランスとの関わり

4日目のフリー巡検で筆者が訪れたのは、神奈川県横須賀市内のヴェルニー公園、横須賀市自然・人文博物館、そして観音崎灯台である。

ヴェルニー公園とは、横須賀製鉄所建設を指揮し、近代工業化の基礎を築き上げたフランス人技師フランソワ・レオンス・ヴェルニーの功績を称えて開園した公園である。旧横須賀製鉄所跡地を対岸に眺めることができ、横須賀製鉄所で使用していた国指定重要文化財の道具が展示されるヴェルニー記念館や彼の像（図2）も立地する。



図2 ヴェルニーの像

ヴェルニーに関わりのある横須賀製鉄所は、世界に肩を並べるには日本の海軍力整備が急務

という国際関係上の要請から江戸時代末期の1865（慶応元）年に建設された。ヴェルニーは幕府の目的をよく理解し、日本人への技術教育に熱心に取り組んだ。

横須賀製鉄所は富岡製糸場とも深く関わりがある。木骨レンガ造は横須賀製鉄所で初めて使用されたのだが、先述したようにその造りは富岡製糸場でも利用されている。そのため、2つの建物の外見はよく似ていたようだ。また、横須賀製鉄所では富岡製糸場向けの製品、例えば水の供給に欠かせない鉄水槽も製造していたのである。さらには富岡製糸場の首長ブリュナはヴェルニーと家族ぐるみで交流があったり、横須賀製鉄所で働いていた日本人が富岡製糸場でのフランス語通訳を務めたりと、強いつながりがあることがわかった。

横須賀製鉄所では日曜休日制、労働時間、健康診断、メートル法などフランスから取り入れた新しい仕組みが始まった。導入されたものは現在につながるものばかりである。横須賀製鉄所で展開された西洋の習慣は我々の暮らしのもととなったのだ。

横須賀市自然・人文博物館には、横須賀製鉄所に関する展示コーナーがあるということで訪れた。横須賀製鉄所の当時の設計図の原本や建築模型、さらには後述する観音崎灯台の設計図を実際に見ることができた。映像展示コーナーではヴェルニーが当時住んでいた住宅のCG再現映像も視聴できた。特に印象に残ったのは日本遺産である横須賀製鉄所で製造された赤レンガを実際に手で持つことができたことである。「ヨコスカ」の刻印が押されたレンガはずっしりと重く、このレンガが横須賀製鉄所や富岡製糸場の建築を支えたのだと改めて認識できた。

最後に訪れたのは観音崎灯台である。日本最初の洋式灯台であり、ヴェルニーが設計した。横須賀製鉄所で製造されたレンガと石灰を使い、フランス製レンズを備えた灯台である。展示室を見学することは残念ながら叶わなかったが、山道を登り、開けた先に真っ白な灯台が見えたときは感動を覚えた。

## おわりに

今回の文化遺産特別演習を通して、日仏交流や、お雇い外国人について学ぶことができた。日本とフランスは筆者が想像していた以上に深い関わりがあった。フランスと交流することにより日本は技術や文化を吸収し、近代化を進めることができたのだ。欠かせないのはやはり建設や技術指導を行ったフランスのお雇い外国人である。横須賀製鉄所で活躍して以降、フランス人は主に造船・製鉄方面に配置されている。さらに、日本の法律編纂にもフランス人が関与している。明治時代の日本はフランスを手本としていたのだ。当時必要だった軍事力の近代化と殖産興業、富国強兵のためにお雇い外国人の活躍は必須だった。日本は積極的にお雇い外国人を利用したが、それ以上の彼らの働き、活躍によって日本は近代化の一步を踏み出し、大きく進んだと言えるのではないだろうか。

富岡製糸場の操糸器にみられるように、日本は取り入れた技術を利用するだけでなく、日本の文化も重んじながら日本人に合わせて改良していったという点が興味深かった。来航したペリーも日本人の能力を高く評価し、「日本人は将来の機械技術上の成功を目指す競争において、強力な相手となるだろう」と日本遠征記に残した。横須賀製鉄所で働いていたお雇い外国人らも、近代化が短期間で実現していく様子に驚いて手記を残したそうだ。その技術の吸収力は、

日本の技術力を支えていたのだ。フランス人が日本に協力すると決め、大きな仕事を成し遂げたのはなぜか。それは日本の技術力の高さや学ぼうとする姿勢、そして日本への信頼があったからなのではないだろうか。

[参考文献]

---

- ・西堀昭『日本の近代化とグランド・ゼコール—黎明期の日仏交流—』柘植書房新社、2008年
- ・富岡市『世界遺産富岡製糸場』富岡市、2018年
- ・ロバートマクシミリアン・ヴォイチュツケ『未完の美術館 調和にむかって—ル・コルビュジエの思想と国立西洋美術館—』Echelle-1、2023年
- ・山名善之『世界遺産ル・コルビュジエ作品群—国立西洋美術館を含む17作品登録までの軌跡—』TOTO出版、2018年
- ・梅溪昇『お雇い外国人—明治日本の脇役たち—』講談社、2007年
- ・各施設パンフレット

# ダークツーリズムを体験して

## —ツーリストの心理変化と変わりゆく観光の形—

2部日本文化学科 1年 2824114 久保 瑞葉

### はじめに

今回、私は文化遺産特別演習に参加するにあたって、関東地方で「ダークツーリズム」を体験した。「ダークツーリズム」とは、戦争や災害の跡をはじめとする人類の悲しみの記憶を巡る旅であり、人身売買や社会差別、そして強制労働などに関連する場もその対象となる。

今回の調査地として巡った場所は、災害地として「嬭恋村の鎌原観音堂と浅間山ジオパーク」へ、戦争の遺構として「日本橋、東京大空襲・戦災資料センター」を訪れた。

私はダークツーリズムの意義とその役割について、自己体験などから観光資源として扱われる負の遺産や資料などを、どのような形で未来に託していくべきかを考察する。また、この調査の目的は「ダークツーリズム」を体験し実際に遺産を巡ることで得られるものとは何かを検証し、観光と「負の遺産」の関係について考え、現代における「負の遺産」の存在価値と、未来に残すべき文化遺産とは何かを考察することである。また、「ダークツーリズム」がすでに抱えている問題である、悲劇の場を訪れること自体を不謹慎とみなす風潮や、悲劇を商売にしているのではないかという批判をふまえて、「ダークツーリズム」の意義について再度熟考し、負の遺産と観光のあるべき姿を模索する。

調査方法については私自身の体験に加え、文献と現地でのインタビューから「ダークツーリズム」を考察することとする。

### 1. 調査結果 1：時を現地でさかのぼるツーリズム

ここからは、私自身がダークツーリズムを関東圏で実際に体験したことを、それを巡った順にまとめていく。

まずは浅間山噴火による災害地として訪問した群馬県の「嬭恋村の鎌原観音堂」で行った調査の結果である。現在、浅間山の北麓に位置する嬭恋村の鎌原集落は、江戸中期の1783年に起こった天明の大噴火で最大の被災地となった場所である。噴火による土石なだれが時速100キロ以上の猛スピードで襲い、鎌原集落を一瞬で丸呑みにしてしまった。唯一無事であったのが高台にあった「鎌原観音堂」(図1)だ。そこには15段ほどの石段と、赤い橋が発見できた。その赤い橋の下に、まだ石段が下に続いていることを確認した(図2)。言い伝えによれば当時は100段ほどあったという。実際に足を運び、今残る段数と比べてみると、どれほどの高さまで土石が流れてきたかを実感することができ、被害の大きさを体感することができる。またこの観音堂の石段からは1978年の発掘調査で、女性2名の遺体が発見されている。観音堂には写真や新聞記事などが貼られ、当時の伝承や復興についての情報が確認できた。結果、悲

惨な過去と復興までの歴史を観音堂で体感しながら、孀恋村を観光することができた。今回は訪れることができなかったが、「孀恋郷土資料館」にはジオラマ等で当時の噴火の様子をより詳しくリアルに知ることができるという。ダークツーリズムは現地で過去の痕跡や資料を実際に目にする事で、まるで過去にタイムスリップしたかのような体験ができ、災害と復興について考えることができるという役割があると分かった。

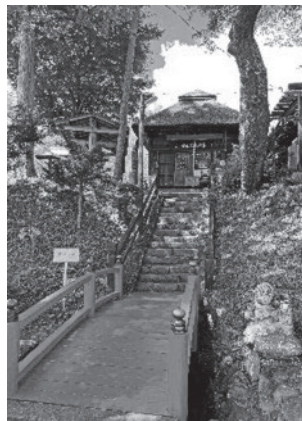


図1

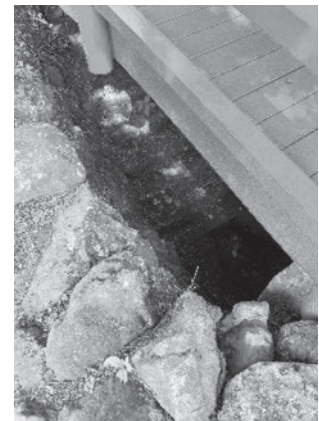


図2

次に、戦災のダークツーリズムとして訪れた「東京大空襲戦災資料センターと日本橋」についてである。東京大空襲戦災資料センター（図3）は2002年に、東京空襲を記録する会が設立した。ここではとくに悲惨な空襲の体験談（ビデオ映像）や資料を確認できた。具体的には、当時の手紙や当時のポスター（張り紙）、部屋の再現などの資料



図3

が展示されていた。特に印象的だったのは戦争を体験した人が実際に目にしたことを描いた絵画である。その絵画にはとても残酷で悲惨な景色がリアルに描かれていた。火に焼かれる人間の姿やその横を逃げて行く民衆、焼け焦げた死体の前で手を合わせる人の絵などが並び、私は時折目を伏せなくなった。このセンターのホームページでは、「センターがめざすもの」として、このような資料から、過去の悲惨な歴史を知ってもらうきっかけをつくり、さらに、伝えていってほしいということを目指しているとの記述もあり、こちらの施設では「悲しみの記憶を継承して歴史を風化させない」というダークツーリズムの意義に沿う経験ができたと感じる。同日、さらに私は「日本橋」を訪れた。日本橋は、江戸時代の1603（慶長3）年にはじめて架けられたといわれ、1873年（明治6）には、車道と歩道が設けられた西洋式木橋に架け替えられた。そして1911年（明治44）、石造の二重アーチ橋が開橋し、今現在に至るという長い歴史を持つ。事前調査で、この橋には戦災による焼け跡が残っているということを知ったので訪れた。行ってみると、管見の限りでは、焼け跡とはっきりわかるような痕跡は見当たらず、橋周辺の看板にもそのような記載は見当たらなかった。しかし、資料センターで確認した、橋に重なる死体や川の中に逃げる人々の絵を眺めてからその現地を訪れてみると、その景色をよりリアルに想像することができ、胸を締め付けられるような感情が押し寄せてきた。この体験から、資料を目にするだけでなく、現地に実際に足を運ぶことで、そうした観光客の心理変化が起こることがわかった。



図4

## 2. 調査結果 2：ダークツーリズムと変わりゆく観光の形

今回、私がダークツーリズムを考察するにあたって、東京大空襲・戦災資料センターで働く学芸員の比江島大和さんにお話を伺った。ここでは、その内容を以下にまとめる。

比江島さんには初めに、ここへ訪れる人たちはどのような方が多いのか質問した。この質問の意図としては、東京という地で、暗い歴史を知ろうとする人々はどのような方が多いのかを知るためである。去年までのデータでは訪問者の3～4割が中高生で、校外学習などで訪れる方が多いという。また、最近ではコロナ禍明けのインバウンド急増の影響もあって、海外からの訪問者も増えてきたようだ。特に、アメリカからの観光客が46%と半数を占め、ほかにオーストラリア、デンマークやドイツなどのヨーロッパからの訪問者も多いという。海外ジャーナリストであるマルコム・グラッドウェルの『Bomber Mafia』（訳名『ボマーマフィアと東京大空襲』）の本にセンターの情報が載ったことも海外の観光客が訪れるきっかけになったようだ。このセンターは民立民営のため、センター側からの観光宣伝などは特に行っていないというが、夏休みなどは学生たちの学習イベント開催などに力をいれていると話していた。暗い歴史の資料センターであっても地元の学生や海外の観光客にとってこの資料センターには需要があることがわかった。

また、現代の観光と博物館の在り方についてもニーズが変わりつつあるという見解もお聞きした。昨年には博物館法に、「地域の教育と産業に貢献すること」という、まちおこしに貢献するように法律が改正されたという。そういった現状のなかで戦争という重たいテーマを取り扱うことは、今後難しくなってしまうのではないかといった懸念もあるという。海外と比べてみても日本は戦争や政治の話进行避ける傾向にあるため、観光とダークな部分の結びつきには今後もまた変化していくのだろうとお話しされていた。

## 3. まとめと考察

今回の調査によって、ダークツーリズムは、暗い歴史をもつ現地に赴き、過去の出来事の痕跡や資料を実際に目にすることで、まるでタイムスリップしたかのような体験をすることができることによって、リアルにその地の歴史を体感することができるという役割があることがわかった。また、資料を目にするだけでなく、現地に実際に足を運ぶことで起こるツーリストの心理変化があることを体感した。悲しみの記憶を伝承していくといった意義を果たし、歴史を学ぶことのできるダークツーリズム。いまだ「負の遺産」を残すことの批判や、観光材料とすることに対して不謹慎であるという意見が課題として残されている。それは、変わりゆく観光の形によって生まれた課題であることが今回の調査により明らかになった。

最後に、今回の体験から、私個人の見解と今後のダークツーリズムの在り方について、ここで述べさせていただきたい。今回のダークツーリズムに対し、私は観光の要素と共に、学びの機会の提供があるということがわかった。これは、ダークツーリズムの優れた点であり、ダークツーリズムを推していくべきポイントであるといえるだろう。

また、今回調査地である関東圏では、都市化している町ほど、暗い歴史に対する話題を避け、明るい歴史を残そうとすることで、地域の発展と活性化を目指しているように感じた。それは、

群馬の鎌原観音堂と東京での調査を比べて、群馬の鎌原観音堂に張り紙や看板があったことに  
対し、東京にはそういった災害や戦争をテーマにした看板などが管見の限りでは見当たらな  
かったことにある。資料を目にするだけでなく、現地に足を運ぶ、そこで実際に心が動かさ  
れるのがダークツーリズムの効果である。知らなければ、そこはただの町の一部に過ぎない。  
故に、暗い歴史のあった場所に看板を付けるなどの対応をして、歴史を風化させない、ダーク  
ツーリズムの一部分を町づくりの一環として取り組むのはどうだろうか。具体的には、今回訪  
れた日本橋に、空襲の跡地であることを看板に記載するなどである。そうすることで、観光客  
に対して、ダークツーリズムの優れた役割である「学びの機会の提供」を果たすことができ  
るだろう。

[参考文献]

- ・井出明『悲劇の世界遺産—ダークツーリズムから見た世界—』文藝春秋、2021年。
- ・井出明『ダークツーリズム—悲しみの記憶を巡る旅—』幻冬舎新書、2018年。
- ・孀恋村役場 観光商工課『TUMATABI holy times vol.2』2019年。
- ・公益財団法人政治経済研究所附属東京大空襲・戦災資料センター『東京大空襲・戦災資料センター  
ニュース No.45』2024年。
- ・東京大空襲・戦災資料センター編『いのちと平和のバトンを—東京大空襲・戦災資料センター図録—』  
合同出版、2022年。
- ・センターがめざすもの —東京大空襲・戦災資料センター  
<https://tokyo-sensai.net/about/concept/>（最終閲覧日：2024年11月29日）

# 浅間山北麓ジオパークと箱根ジオパークの違い

2 部日本文化学科 4 年 2821115 河端 倭太郎

## はじめに

今回の文化遺産特別演習に参加するにあたり、地域遺産を守りながら、教育やツーリズムに活用し持続可能な開発を進めることを目標にしているジオパークに興味を持った。そこで、実際にジオパークを訪れることでどんな活動をしているのか、また異なる2つのジオパークを訪れて比較することでどんな違いがあるのかを調査することを目的とした。

今回調査で訪れた場所は、浅間山北麓ジオパークに含まれる嬬恋村の鎌原観音堂と八ッ場ダム、箱根ジオパークに含まれる箱根町立箱根ジオミュージアムである。また、浅間山北麓ジオパークでは総合インフォメーションセンターでお会いしたジオパーク専門員の古川広樹さんに聞き取り調査を実施した。

## 1. 調査結果

鎌原観音堂では、天明の大噴火によって受けた影響が観光客にわかりやすいように解説したパネルや噴火からの再興の様子を収めた写真や新聞記事などが観音堂の前に掲示されていた。他に観音堂の前には石段がもともと50段あったそうだが、そのうちの大半が土石流に飲み込まれ今は15段しか見えないことや、発掘調査によって被災者の人骨が発見されたことがパネルで説明されていた。嬬恋村の鎌原観音堂では噴火による被災の影響やその歴史を学ぶ場となっていることが窺えた。

次に訪れた総合インフォメーションセンターではジオパーク専門員の古川広樹さんにお話を伺った。ジオパークではどんなことをしているのかを古川さんに尋ねたところ、ジオパークの活動の主な目標として、1) 保全、2) 教育、3) 持続可能な開発の3点を教えていただいた。

それぞれの活動についてみていくと、「1) 保全」活動として実際に見えたのは、総合インフォメーションセンター付近にあったジオパークを紹介するパネルに、自然を守るための注意書きが書かれていたことである。また浅間山北麓ジオパーク推進協議会が出している行動計画書から「防災や減災のため浅間山でボーリング調査を行っていること」を知った。さらに、保全活動と経済活動が現状あまり結び付いていないことを古川さんから伺った。



次に、「2) 教育」活動については、小中高と連携して、中学校では火山学習、高校ではポスター発表などの野外学習や出前講座を行うなど、学年が上がるにつれて高度な内容を学習できるよう工夫していることを知った。そして、「3) 持続可能な開発」に関する活動では、火山活動によってつくられた地形を利用したキャベツの生産量が日本1位を誇っていることや、その



キャベツが更に「この素晴らしい世界に祝福を！」という作品とコラボさせることで、ジオパークに興味がない人にも広告として活躍していた。

古川さんにはさらに、浅間山北麓ジオパークの魅力について伺ったところ、ジオパーク内には39の「地形・地質・文化などの保全された遺産である」サイトと「今を生きている文化・自然である」フィールドがあり、学びとツーリズムの距離が近いことが魅力であることがわかった。また他の魅力としてやはり日本一の生産量を誇るキャベツ畑、別荘や温泉のある軽井沢のリゾート地に近いことで、年間で約1万人の観光客がジオパークを訪れていることがわかった。この地を訪れた観光客が実際に近隣の市町村に移住してくることも多く、その方たちがガイドとして働いている場合もあることを教えてもらった。しかし、ガイドの8割が移住者で、ガイドが移住者に支えられていること、移住者と地元民との「ソトとウチ」の問題があることも教えていただいた。

最後に、八ッ場ダムではガイドの浦野安孫さんから話を聞きながら周っていった。ダムは観光地化されている一方で、ダム建造前の周辺地形が模型となっていることや、ダムの仕組みを説明するための装置が設置された施設（なるほど！やんば資料館）もあり、学びの場でもあることに気が付いた。浦野さんから聞いた説明で印象に残っているのが次の話である。「草津のいいところ、葉の出で湯」というカルタにもなっているように、この近くの草津温泉は一度入れれば忘れないピリピリするのが特徴なのだが、それは強酸性であるからで、ダムを建造しようとした昭和30年の時代にはダムを建ててもコンクリートが溶けてしまうといった問題を抱えていた。その後、川全体を中和するための中和工場や沈殿物を沈殿させる工場が建造された。そして、様々な努力が実を結び計画発表から68年という年月をかけて2019年にダムが完成した。

ダムでは階段を利用したレースイベントの開催、放水を利用した発電、ダムの涼しい環境を利用してワインやウイスキーを作っていることを聞き、八ッ場ダムでも学びの場とするだけでなく、観光地化して商品売ることによって経済活動にも取り組んでいることがわかった。

## 2. 箱根ジオミュージアムでの調査

4日目のフリー研修で箱根ジオパークの箱根ジオミュージアムに訪れた。朝早くにホテルを出て箱根山に向かい10時ごろに到着した。そこは外国人観光客で溢れていた。箱根山は付近に宿泊施設があることや、長寿の源である黒たまごの販売、ロープウェイ、お土産屋など観光地として十分に機能している印象を受けた。

箱根山ジオパークのジオサイトの1つである箱根ジオミュージアム内には、箱根山が出来るまでの歴史や噴出物などが展示されていた。その他にもハザードマップや、色々な種類のパンフレット、誰でも入手できる箱根山ジオパークのガイド冊子が置かれていた。箱根ジオミュージアムでは誰でも足を運んで気楽に見られるように一話完結型のパネルが設置されているので、自分の好きなように楽しむことができた。また、大涌谷自然研究路と呼ばれる大涌谷噴気地帯を散策する予約制の体験活動も用意されている。

バスやロープウェイなど他のジオサイトにも簡単に向かうことができるし、お土産屋も大きいので観光地としての側面を強く感じる一方、学びの場としての側面は箱根ジオミュージアム

だけでは少し不足を感じた。

#### おわりに（2か所のジオパークを比較して）

浅間山北麓ジオパークでは、嬭恋村の鎌原観音堂が天明の大噴火の歴史を後世に伝える役目をもっている。火山による被災で多くの人が亡くなり、そこから再興を果たして今の嬭恋村があるので、安易な観光地化にはしないのではないだろうか。日本人を対象としている特徴も窺えた。

一方、箱根ジオパークはやはり宿泊施設やロープウェイといった交通の利便性や箱根山自体が観光の対象となるため、観光地化が進んでいることが見受けられた。箱根ミュージアムには火山の歴史、噴出物や剥ぎ取った地層が展示されていた他、硫黄の使い道など火山からの恩恵を強く受けている展示が目立っていた。このことから、今の形のジオパークになったのではないかと考えた。また、外国人向けのサンリオキャラクターとのコラボ商品などが見られたことから、浅間山北麓ジオパークとは異なり、外国人を強く意識していることも窺えた。

最後に、肖鋳「ジオパークにおけるジオツーリズムの実態と課題—雲南石林ジオパークの事例—」における中国のジオパークの事例では、観光客が集まったことによりごみのポイ捨てにより自然環境が悪くなるといった問題点が紹介されていたが、今回の調査では浅間山北麓ジオパークではゴミのポイ捨てといった問題は見えなかった。また、箱根ジオミュージアムでもゴミ箱が多めに設置されており、ポイ捨ては見られなかった。これからさらに観光客が増えていくことで、またそういった問題が増えるかもしれないため、注意する必要があると感じた。

#### [参考文献]

- 
- ・浅間山北麓ジオパーク推進協議会「浅間山北麓ジオパーク行動計画 2022-2025」  
行動計画 2022-2025.pdf
  - ・浅間山北麓ジオパーク推進協議会「浅間山北麓ジオパーク基本計画」  
浅間山北麓ジオパーク基本計画 2021-2025.pdf
  - ・肖鋳「ジオパークにおけるジオツーリズムの実態と課題—雲南石林ジオパークの事例—」『ICCS 現代中国学ジャーナル』第11巻、第1号、2018、46-61頁

令和6年度 文化遺産特別演習報告書 第4号

発行日 令和7(2025)年3月1日

発行 北海学園大学人文学部

印刷 株式会社アイワード

文化を学ぶ 世界と繋がる



# 北海学園大学人文学部

日本文化学科(1部・2部) / 英米文化学科(1部・2部)

〒062-8605 札幌市豊平区旭町4丁目1番40号

TEL.011-841-1161(代表) FAX.011-824-7729

URL <https://human.hgu.jp/>